

学 位 論 文 題 名

Contrast, Concessive, and Corrective:
A Unifying Analysis of Opposition Relations in English

（対照・譲歩・訂正－英語を中心とした逆接の
意味分類に関する包括的研究）

学位論文内容の要旨

本論文は英語の逆接表現の研究でありその目的は2つある。第一に逆接の意味分類を行い各範疇の意味特徴を提案すること、第二に逆接のそれぞれの範疇の共通点と相違点を明らかにすることである。

本論文は逆接の各範疇の分析に、Langacker (1987, 1991 など)が提案する認知文法の枠組みを用いている。逆接の表現は、しばしば同一文でも様々な解釈が与えられることがあるが、理由のひとつは逆接の解釈には字面の意味だけでなく言外の意味が含まれ、字面の意味と言外の意味が複雑に相互作用するためである。このような解釈の多様性と複雑性を捉える上で、言語の意味を概念化ととらえ言外の意味を扱う明確な道具立てをもつ認知文法は有効な分析を提供することが期待できる。本論は、先行研究の考察を基にその不備な点に修正を加え、英語の逆接関係を対照・譲歩・訂正の三つの意味範疇に分類し、そしてこれらを比較するための四つのパラミターを提案している。

言語資料については、英語の複数のコーパスから実例を集めて分析している。使用したデータのほとんどは英語だが、必要な場合は他言語からのデータも一部参照し類型論的視点を取り入れている。

第一章は、本論文の研究対象を明らかにし、これまでの逆接研究の不十分さを指摘している。その上で妥当な意味分類と各範疇の意味に関する明示的な説明が不可欠であることを主張している。

第二章は、伝統的な六つの逆接研究の分類を取り上げ、用語や定義の点で統一的な見解が見られないことを明らかにしている。次に、Foolen (1991)の語用論的研究を参考に、逆接は大きく分けて、「対照」「譲歩」「訂正」（の三つの意味範疇に分類できることを提案している。そして、これらが妥当な分類で

あることを示す根拠として類型論的事実、英語では三つの意味を従属接続詞や接続副詞等によって個別に表示することができること、さらに統語的にも各意味固有の振る舞いがあることを挙げている。

第三章は、三つの意味範疇に関する先行研究の扱いを概観している。従来の研究では、逆接関係は二項対立的に扱われることが多く、三つの意味を包括的に扱った研究がほとんどないことを指摘している。このような事実を基に、三つの逆接的意味に関する包括的研究の必要性を主張している。

第四章は、先行研究の考察と問題点を踏まえ、三つの逆接の意味範疇を比較するための四つのパラミターを「共通した領域における異なる比較対象の相互排他性」「比較対象の数と種類」「想定関与」「接続された要素の妥当性」と設定している。

第五章は、対照の意味特徴を提案し、対照は「二つまたはそれ以上の命題内容の間に見られる対立関係（相互排他的な関係）」であることを示している。

第六章は、譲歩の意味特徴を提案し、譲歩は「何らかの想定が関与する対立関係」であることを示している。具体的には、先行研究の考察を踏まえて、譲歩を直接譲歩(Direct concessive)と間接譲歩(Indirect concessive)と命名し、前者は想定と命題内容、後者は二つの異なる想定の間に見られる対立関係であることを示している。

第七章は、訂正の意味特徴を提案し、訂正は「拒絶された意味内容と断定された意味内容の対立関係」であることを示している。ここで拒絶されたり断定される意味内容は大小様々な統語単位によって表示されることを観察している。

第八章は、まず、第五章から第七章で行った意味分析を基に、三つの意味範疇を四つのパラミターの点から比較した結果を表にまとめている。

本論が主張する主な論点は以下のものである。三つの逆接の意味全てに共通するのは、第一パラミター（共通した領域における異なる比較対象の相互排他性）である。逆接関係に対して直感的に抱く対立性は、この第一パラミターによって明確に示される。三つの意味の違いは、対照は第二パラミター（比較対象の数と種類）において他の逆接的意味と区別される。つまり、対照のみが二つ以上の比較対象を許容する。そして、譲歩は第三パラミター（想定関与の有無）において他の二つの意味と異なる。譲歩だけがその対立関係に想定が関与する。訂正は第四パラミター（接続された要素の妥当性）において他の意味と区別される。つまり、訂正だけが接続された要素のうち一方の妥当性が拒絶されるという特徴を持つ。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 高 橋 英 光

副 査 助 教 授 野 村 益 寛

副 査 教 授 山 田 貞 三

学 位 論 文 題 名

Contrast, Concessive, and Corrective: A Unifying Analysis of Opposition Relations in English

(対照・譲歩・訂正－英語を中心とした逆接の
意味分類に関する包括的研究)

逆接関係はすべての言語において表現されるが、その表現の仕方や構文は言語によって様々である。英語の逆接の意味分類については、これまで多くの研究があり、多くの用語や複数の分類が提案されてきたが、以下の3つの問題が残されていた。第一に、逆接の分類法についても用語についても統一的な見解に至っていない。第二に、逆接の意味範疇を包括的に比較する尺度が提案されていない。第三に、下位範疇間の共通点と相違点が不明なままであった。第四に、衝突 (clash) とか対立 (conflict) という直感的な説明に依存する傾向があった。

本論は認知言語学のアプローチを利用して先行研究が抱える問題を解決するのに概ね成功している。具体的な成果としては、第一に、類型論的根拠と統語的根拠に基づいて逆接は3つに分類すべきであることを明らかにし、用語に統一を与えたことである。逆接表現は3つに分類できることを唱える研究は以前からあったが、本論文はこの立場に明確な根拠を与えたと言える。第二に、対照、譲歩、訂正という逆接の三つの意味範疇を包括的に分析する四つのパラミター、すなわち「共通した領域における異なる比較対象の相互排他性」「比較対象の数と種類」「想定関与」「接続された要素の妥当性」を設定したことである。第三は、第二の結果、逆接の下位範疇の共通点と相違点を浮き彫りにするのに成功したことである。第四は、直感的な説明に依存する傾向があった従来の逆接研究をより検証可能な形で議論をする土台造りを築いたことである。さらに、本論文が考案した4つのパラメーターは英語の逆接表現だけではなく他

の言語にも広く応用できる可能性を秘めている。これらの点から、本論文が逆接研究として一定の成果を収めているのは疑いがない。

ただ本論文には不備がないわけではない。ひとつは、本論で言及されている想定メカニズムの掘り下げが不十分な所が見受けられることである。想定とは推論の一種と考えられるが、近年認知言語学で研究が進んでいる推論のメトニミー分析への言及がないのは惜しまれる。さらに、本論の分析が、逆接表現各々の統語的性質をどのように説明するのかという問題が残されている。本論文は、照応現象については一応の言及があり興味深い論考を行っているものの、その一方で譲歩と異なり対照では節の入れ替えができるのはなぜかについては言及がない。しかし、これらは今後の課題とすべきものであり、本論文が示した先駆的研究における学問的価値を損なうものではない。本論文は、英語の逆接表現の豊かなデータと独自の視点を提供しており、逆接研究と認知言語学研究の両面に大きく貢献していることには疑いがない。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ねた結果、全員一致して井筒美津子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。